

県中教育

編集・発行
福島県教育庁県中教育事務所
発行責任者 歌川 哲由
編集協力
県中市町村教委連各支会
県中各地区小中学校長協議会

随想



「教育改革の中に思うこと」

県中教育事務所長 歌川 哲由



中教審の教育課程部会が、昨年八月に公表した次期学習指導要領の策定に向けた論点整理の中で、二〇三〇年以降の社会を見据える背景として、「子どもたちの六五％は将来、今は存在していない職業に就く・・・」などの予測を例示していたのを目にし、「コンピュータが仕事を奪う」（二〇一〇年国立情報学研究所教授新井紀子氏著）を読み返してみた。

二十一世紀においてその職を追われる可能性があるのは、コンピュータによって代替可能なホワイトカラーの大半であることを論理的に述べていて説得力がある。しかも私達に関わる多くの子どもが、将来そのホワイトカラーを目指すかと思うとぞっとする。

しかし、この著書の真意はコンピュータに対する人間の優位性を確保するために、何を学ぶべきかということである。教育に携わる者として心に残るのは、育成すべき資質・能力として、**論理的に考え言語化する能力**を重要視すべきということである。

勝手な解釈を看過いただければ、**子どもと真剣に向き合い、人間的な関わりの中で共感的に理解（し教育）する態度が大切**ということか。これは正に教師としての不易の態度である。

次期学習指導要領でも引き続き三本柱の一つに「思考力・判断力・表現力等」が上げられているが、小学生の段階から論理的に考えて言葉や文章で説明する活動を仕組むことで、コンピュータが苦手とする領域の資質・能力を高めることの重要性を痛感する。

全ての教員が授業するより、優秀な教員の授業を動画配信する方が高い教育効果を得られるという極論までもが実践に移される昨今だが、教師の矜持を保つには、子どもとの信頼関係を強固にした教育愛あふれる授業で勝負したいものである。折しも、教育再生実行会議の提言は次々と教育施策として実施に移され、次期学習指導要領の策定に向けて教育改革は加速するだろうが、教育の体制や内容が変わっても、子ども一人一人に耳を澄まして行きたいものである。

もう一つは、教師の子どもへの関わりについて、多分に抽象的だが「**耳を澄ます**」ことが大切で、この能力こそがコンピュータに対して人間が勝てる分野

である。」ということである。

あいさつ坂



古殿町教育委員会
教育長 矢吹 伸一

「明け暮れ登り また下る
この坂道に 刻む夢」

古殿中学校の校歌三番にある歌詞である。古殿中は山の頂上にあり、平らな町道から校門に辿り着くまで、三百m近い急勾配の坂道を登りきらなければならぬ。自転車通学の生徒は、もちろん坂道の下に自転車置き、そこからは徒歩の登り下りである。

その急勾配の坂を通り過ぎる車に向かって、息切れしながら歩く生徒たちが、必ず立ち止まり、車に向きを変え、運転者へ深々と頭を垂れ、元気にあいさつをする。「あいさつの古中」と言われる姿がそこにあり、伝統となつてたくさんの後輩に引き継がれ、いつしかこの坂を、子どもたちや地域が「あいさつ坂」と呼ぶようになった。

古殿町教育委員会に勤務して三ヶ月。朝夕、鮫川沿いのコスモス通りを徒歩で通勤しているとき、自転車通学の中学生が背中の方から、「おはようございます」「さようなら」と声をかけ

てくれる。後ろをふりむきながら、あいさつを交わすのは初めての経験かもしれない。ひたむきでまじめな中学生の姿に感動する。

四月六日、古殿中卒業生である自転車競技の窪木一茂選手がリオ五輪日本代表選手に選ばれた。町からは同じくソウル五輪に自転車競技で出場した鈴木光広選手以来二十八年ぶりのオリンピック選手誕生である。

窪木選手もまた、あいさつ坂で心身を鍛え、学石高、日大自転車部で活躍、長距離のロードでも、中距離のトラックでも全国制覇を果たす、極めて稀なオールドランダーの選手として、日本代表の選手に成長、現在はイタリアのプロチームに加入し主戦場をヨーロッパに移している。

「人は人によって育てられる。」

あいさつ坂で育った先輩の後ろ姿を目標として、また未来のオリンピック選手が、この中学校、我が郷里から育つことを期待したい。

子どもの読書活動を推進する取り組みについて

〜平成二十八年度
 子どもの読書活動優秀実践校
 文部科学大臣表彰を受賞して〜

郡山市立緑ヶ丘中学校

本校には、「一年間で良書を二十冊読破しよう」という目標があります。

朝の読書が定着し、読書に親しむようになりましたが、読書をする生徒としない生徒の二極化や読む本に偏りがあることが、本校の課題でした。そこで、「個人の読書（個読）からみんなで読む読書（共読）へ」をテーマに、全校態勢で読書活動を進めてきました。

主な活動には、読書行事の「クラス対抗読書パズル」と「ビブリオバトル」があります。
 本校では、五月と十一月を読書推進月間としており、この期間は全校を挙げて読書に親しむようにしています。そして、この期間中に読書行事として、「読書パズル」と「ビブリオバトル」を実施しています。

「読書パズル」は、クラス対抗で行う行事です。各クラスの図書委員が好きな本を選び、表紙のコピーでジグソーパズルを

作ります。学級の全員が、図書館の本を借りるとピースがそろい、パズルが完成するというものです。最初に完成したクラスには、賞状が授与されます。このパズルが完成するには、図書委員の呼びかけや担任の先生の協力が必要です。生徒たちは、パズルを早く完成させようと競って図書館を訪れます。この期間は、図書館に足を運ぶ生徒がぐんと増えます。



「ビブリオバトル」は、今では、一般的に行われていますが、本校では、三年前から実施しています。これは、知的書評合戦というように、自分がみんなに紹介したい本を五分間でプレゼンテーションし、読みたいと思った本をチャンプ本として選ぶという読書紹介の方法です。主に、国語の授業の中で実施していますが、昨年度は秋の読書行事の一つとして、学年の枠を外して行いました。

そのほか「緑ヶ丘中推薦図書五十冊」の配付、図書委員によるライブラリー放送や情報ファイルの作成、「先生お薦めの一冊」などを行っています。また、コルクボードを利用して新刊図書の紹介をし、常に生徒の動線上に本の情報があるようにしたり、ノート展示会に向けてノートの取り方の本を展示したりするなど、学校行事との関連も図っています。

このような活動の結果、昨年度は「良書を二十冊」を達成した生徒が、全校生徒の四分の一の百人にもなりました。より多くの生徒が読書に親しむように、これからも様々な工夫をしていきたいと考えています。

福島県緑の少年団

実績発表大会知事賞受賞

「地域の方とともに

未来へつなぐこと」

田村市立緑小学校

本校では、震災以前から緑の少年団活動が盛んでした。学校林もあり、シイタケの栽培などもしていました。震災の後、活動がしばらくできなくなり、二年前に本校の特色を生

かす教育を進めるうえで少年団活動は欠かせないと考え、再び始めました。

新しい少年

新しい少年団の目標を「地域の方とともに緑を育て、守り、未来へつなぐこと。」として活動を始めました。具体的には大きく三つの柱で活動をしてきました。



一つめは「絆の桜」です。親子で校地に桜を植樹し、それぞれの桜に児童一人ずつ世話係を決めて育てます。年に二回肥料をやり、夏には周囲の草むしりをします。夏の暑い中の作業でたいへんですが、周りの雑草に栄養を取られないようにするために大切な作業です。卒業生の桜は、新しい一年生が引き継ぎます。代々受け継ぎながら育て、十年後に「花見をする会」を開くことを目指しています。

二つめは、花の栽培です。「学校や地域を花でいっぱいにする。」を目標にしています。学校の花壇には、春になるとチューリップやパンジーが美しく咲き誇ります。特に地域の人々に緑を楽しんでもらうために少年団でミニヒマワリを育て

ました。地域の方に教えて頂きながら二百個のポットに種をまきました。夏休みは、交代で学校へ来て水やりをしました。敬老の日に開かれた「移地区敬老会」では高齢者の方にプレゼントし、とても喜ばれました。

三つめは、森林環境学習です。緑小の学校林は、まだ使えないので「フォレストパークあたたら」や「逢瀬公園・緑化センター」で、森林環境を学習しています。「福島県もりの案内人」と共に森林の役割や楽しみ方、バードウォッチングなども体験しています。案内人の方から「木を守ることは地球を守ることにもなる。」という話が残りました。

今後、地域の方とつながりながら、素晴らしいふるさと「移の里」を今以上に明るく元気にしていきたいと願う活動を続けていきます。



ALL JAPAN
 JUNIOR GREEN FRIEND'S
 FEDERATION

初任者紹介

新採用三か月を過ぎてく

三か月を振り返って

須賀川市立小塩江幼稚園

保育教諭
有我 美咲

幼稚園保育教諭として、あつという間に三か月が過ぎました。毎日の保育活動を考えたり、事務的な仕事に取り組んだり、慣れないこともたくさんありましたが、それ以上に受け持っていた子どもたちの日々の成長や笑顔を目の当たりにすることで充実した毎日を送ることができています。

着任当初は、小学生の時から夢だった幼稚園の先生になれた嬉しさと期待でいっぱいでした。反面、担任としてやっていくのかという不安や緊張も同じくらいありました。しかし、今は、先生方のご指導や、子どもたちとともに過ごせる喜びから、少しずつ不安を解消できています。

子どもたちの大切な未来の土台づくりの役目を忘れずに、子どもたちとともに、私も成長し続けていこうと思います。そして、いつか先輩からの教えや自分の学びを後輩に伝えていくことが出来る先生になりたいと思っています。

子どもたちとの三か月

石川町立石川小学校

教諭
三浦 昌佳

「子どもの心に寄り添える教員を目指します。」と挨拶した日から三か月が経ち、現在は子どもと関わることの難しさを日々実感しています。そんななかでも、先日嬉しい出来事がありました。

担任するクラスに在籍している、ある子どもへの接し方がうまくいかず、どのように距離を縮めれば良いのか悩んでいました。しかし、あるとき保護者の方から、子どもが家庭訪問を楽しみにしており、「先生はいっ来るの。」と何度も聞いてきたということや、先生が家に来てくれたことをとても喜んでいたりという話を教えていただきました。その話から、私とその子どもの距離は少しずつ縮まっていたのだと知り、ほっとしました。

一人一人の子どもの心に寄り添うことは簡単ではありません。努力しなければならぬことはたくさんありますが、子どもたちの笑顔のためにこれからも学び続けます。

三か月を振り返って

郡山市立緑ヶ丘中学校

教諭
青木 祐輔

教員として、社会人としてのスタートから、早三か月が過ぎました。忙しい毎日でありながらも、恵まれた環境の中で日々充実感を味わいながら過ごしています。

しかし、この三か月で生徒のために何ができただろうと考えると自分の未熟さを痛感するばかりです。先生方の温かいご指導とサポートのもとで過ごせることに感謝の気持ちを持つと共に、恵まれた環境だからこそ誰よりも自分に厳しくありたいと思いつつ、日々の学びをどのように生徒に還元できるのかを考える毎日です。

「学ぶことを辞めたら、教えることを辞めなければならぬ。働きかける者が働きかけられるのである。」

学生時代に心にとまった言葉が今となって私のやる気の根源となっています。自分の未熟さを知れば知るほど、やる気が漲ってきます。生涯学び続けることのできる教員でありたいと思っています。

特別支援学校の教員として

福島県立郡山養護学校

教諭
菊地 春芳

特別支援学校の教員として働き始めて三か月が経ちました。不安もたくさんありましたが、周りの先生方に助けてもらいながら毎日充実した日々を過ごしています。

この三か月間は子どもたちと信頼関係を築くことを大切にしてきました。子どもたちの思いを受け止め、学校生活を一緒に楽しんでいく中で、子どもたちとの距離が縮んでいったように感じます。最近では様々なことに挑戦する姿や教師と積極的にやりとりをする姿がたくさん見られ、子どもたちの成長に毎日驚かされています。子どもたちとかかわっていく中で、子どもたちの主体性を大切にできる教員、思いやりのあるあたたかい教員を目指していきたいと思えました。

夢だった特別支援学校の教諭になれた喜びを忘れず、これからも全力で子どもたちとかかわってまいります。

一歩一歩、着実に

田村市立美山小学校

養護教諭
尾崎みのり

新採用養護教諭として田村市立美山小学校に着任し、あつという間に三か月が過ぎました。新しいことの連続で右往左往する毎日ですが優しく声をかけてくださる先生方、保護者、地域の方に支えられ、楽しく勤務しています。

これまで言葉で理解していたことが、この三か月で実感を伴うことが多くなってきました。子どもたちを見てみると、この短い三か月の間にも身長が伸びたように見えたり、表情が少し大人っぽくなったように見えてりと、子どもたちは日々成長しているのを感じます。そうした日々の中で、私は子どもたちの人生の中で大切な成長過程に関わっているのだ、という実感に伴った思いが日に日に強くなり、責任の重さを感じています。

自分の未熟さに焦ることもありますが、学校全体の健康を守り育てるため、学び、挑戦する心を忘れずに一歩ずつ成長していきます。

総務社会教育課
社会教育担当より

「第一回地域家庭教育推進
県中ブロック会議」

県内七地区における家庭教育の推進や地域教育力の向上に向け、PTAや各種団体、企業等が連携して取り組むための協議を年間二回開催しています。

県中地区では、六月二十三日(木)に学識経験者、県中地区四PTA連合会、子どもと関わる団体、企業等の代表十五名が推進委員となり第一回目の会議を開催しました。

会議の中では、国際メディアカルテクノロジ専門学校の岡崎史紹氏から、「子ども達を健康に導く運動プログラム」について紹介を頂きました。このプログラムは、県中地区の幼稚園・小学校等で開催する「親子の学び応援講座」の中で実施します。

また、郡山警察署生活安全課専門少年補導員の安齊かおり氏から、スマートフォンやSNS等によるトラブルや少年犯罪の現状等について情報提供を頂きました。

その後、本年度、県中地区として取り組む二つの課題、「メディアコントロール」と「子どもの健康・体力」につ

いて、協議を持ちました。各推進委員の皆様から、課題に対する認識やこれまでの取組等について、それぞれの立場からお話し頂き、活発な意見交換がなされました。この協議の内容を受け、各推進委員の皆様にはそれぞれのお立場で、課題解決に向けた取組を推進していただきます。

「親子の学び応援講座」

子どもたちのよりよい成長のために、親自身が果たすべき役割を学ぶ「親子の学び応援講座」を、七月一日に天栄村立牧本小学校、七月十三日には浅川町立浅川幼稚園で開催しました。この講座は、「子ども達を健康に導く運動プログラム」を活用した活動です。

ボールを使って、親子で一緒に運動することを通して、体を動かすことの楽しさを感じながら、親子の触れ合いを深めました。



学校教育課管理担当より

「服務倫理委員会の活性化
不祥事根絶に向けて」

本年度は四月当初から、同僚に対するセクシャル・ハラスメントという重大かつ悪質な非違行為により、停職六月の懲戒処分を付しました。

各校においては、教職員に対する信頼を回復すべく、不祥事根絶の具体的取組について主体的に検討し、透明性の高い風通しの良い職場づくりに努めるなど、実効ある服務倫理委員会を開催していただいているところです。その中の特色ある取組をいくつか紹介します。

- ◎「月」ごとの重点事項を出勤簿の前に掲示し、出退勤時に確認(日常的な意識化)
 - ◎「不祥事防止標語、わいせつ・セクハラ防止標語」の作成・掲示
 - ◎「通勤経路ヒヤリマップ」の作成・配付
 - ◎飲酒を伴う場合は午後九時に終了(二次会なし)
 - ◎スタッドレスタイヤ交換時の管理職への報告
 - ◎「セーフティチャレンジ」への全教職員参加
 - ◎部活動指導における「勝利至上主義」から「過程重視の指導」への意識改革
- 今後とも、教職員の和を大切に、心に響く取組がなされるよう願っています。

学校教育課指導担当より

「確かな学力」を
組織的な取組で

県中教育事務所では、今年度の授業の充実・改善、校内研修の充実、「学びの基盤づくり」の二つの柱で「確かな学力」の向上を目指すことを推進しております。具体的には、「授業づくり」と「主体的・協働的に学ぶ学習集団づくり」をバランスよく行うことで、児童生徒の活用力や学習意欲が高められるものと考えております。また、このことは学校全体での組織的な取組こそ、有効であると考えております。

去る五月十日に開催された「第一回域内学力向上担当者等研修会」でも、各学校の学力向上に向けた課題解決のための方策とその進め方について、協議することで、各学校での今年度の見通しを確認していただいたところでした。



また、今年度も「つなぐ教育」の推進地域に、石川町と田村市立船引南中学校区を、定着確認シート実践協力校に、天栄村立大里小学校と玉川村立須釜中学校の二校を指定いたしました。秋の実践公開や第2回域内学力向上担当者等研修会で成果をお伝えする予定ですので、参考にしたいと思っています。

「自分手帳の活用」について

自分手帳は、ふくしまっ子体力向上に総合プロジェクトの一環で配付したものであり、健康診断や体力・運動能力および食習慣の調査結果を継続して記入・管理できるものとして作成しました。

現在、子どもの体力や運動能力の低下・肥満の増加が心配されています。この手帳は「運動・健康・食生活」の三つに大きく分かれており、学校だけではなく家庭と連携して、子どもの大切な成長期間を見守っていただけるような構成となっています。取組の中で、自分の身長や体重の推移を自ら記入することで、成長の様子に改めて興味をもったり、運動能力調査のスコアを記入することで、昨年から伸びや自分の得意・不得意分野に気づいたりすることが出来ます。また、生活習慣を改善するために「毎日走ろう」「寝る前に腹筋をしよう」「好き嫌いしないで食べれば背がのびる」などと、子ども達が素直に感じ取り、考え直す一つのきっかけともすることが出来ます。記入には指導を要したり、多少の時間がかかったりしますが、「自分で記入する」ところに大きな意味があると考えております。各学校では、教育課程に位置づけ、工夫した活用をお願いします。

